

わたり病院の 医師臨床研修理念

住民の医療要求に応え、
患者様の人権を守る立場
で社会的に信頼される医
師となるための基礎づく
りを行う

ふくしま



医療生協

2021年4月号 第417号
発行責任者 山口 裕
<http://watari-hp.jp/>

福島医療生活協同組合	TEL 024-522-1236	〒960-8141	福島市渡利字中江町66番地
医療生協わたり病院	TEL 024-521-2056	〒960-8141	福島市渡利字中江町34番地
生協いの診療所	TEL 024-562-4120	〒960-1301	福島市飯野町字後川27-2
医療生協わたり病院附属 ふれあいクリニックさくらみず	TEL 024-559-2664	〒960-0241	福島市笹谷字釜谷地20-1



左から福地医師、松本医師、湯田医師、片岡医師

研修医の1年

病院や診療所等で勤務する医師になる場合、日本では6年間の医学教育と医師国家試験を経たのち、2年間の臨床研修が義務付けられています。医療生協わたり病院は、厚生労働省認可の基幹型臨床研修病院※です。昨年度、研修に励んだ4名の研修医からメッセージを寄せていただきました。

※厚生労働省が定めた基準をクリアし、独自の研修プログラムを有している病院。県内には18の基幹型臨床研修病院があります。

研修修了しました

2021年3月研修修了認定

福地 雄太

2年間の初期研修も残り1カ月となり、大詰めとなりました。(2021年3月初旬寄稿)研修をさせていただいた病院、先生方、スタッフのみなさんのおかげでここまでできました。

一番の思い出は、外科研修で初執刀を経験できたことです。責任感を実感しました。術後も大丈夫かおそろのおそろ見ていた覚えがあります。現在は、地域医療研修のため南会津に来ております。自然を楽しみ、かつ研修修了を目指し頑張ります。

振り返りと抱負

2年次研修医 松本 明紘

研修医生活が始まって約1年が経ちました。多分野にわたる研修を振り返ると、医学知識はもちろんですが、人との関わり方や考え方を多く学んだ期間であったと感じました。個人的な先入観ですが、病院が好きでいらつしやる患者さんはごくわずかだと思います。何らかの悩みを抱えていらしては訳ですから、その声を傾聴し、解決への糸口をしっかりと考えられるような医師になりたいと思います。今

後ともどうかよろしくお願いいたします。

ます。

感謝の1年

2年次研修医

湯田 優衣

1年前の春、突然のコロナ流行に、すべての方々が恐怖心と不安感でいっぱいだったと思います。それは私も同じでした。幼少の頃から抱き続けた「医師になりたい」という夢が叶い、喜びや希望に胸を膨らませながらも、混沌とした情勢の中で、例年になく漂う緊張を感じながらのスタートでした。そのような中でも、病院職員のみなさん、患者さん、地域のみなさんをはじめ多くの方々に温かく迎えていただき、無事に1年間を終えることができました。本当に感謝しています。研修医2年目もわたり病院を中心に、複数の病院で研修させていただき、二つひとつ確実に成長していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年度はさらにレベルアップを

2年次研修医 片岡 秀真

私は、福島県民医連の奨学

4月から新たな 臨床研修医が入职します

福地 雄仁(ふくち よしひと)

福島県立医科大学卒
喜多方市出身

佐藤 和磨(さとう かずま)

大阪医科大学卒
福島市出身

生であつたこともあり、初期研修をわたり病院でお世話になることを決めました。最初の3カ月はわたり病院の内科で研修し、その後約半年間協力病院で整形外科や麻酔科、外科、救急科研修を行いました。現在は再度わたり病院で内科研修をしています。この1年間はとても新鮮なもので、日々の勉強はもちろんですが、それ以上に患者さん・地域の皆様と触れ合うことで、多くのことを学び成長しているように感じています。指導医をはじめ医局の先生方、職員の方々、患者さん、地域のみなさんのご協力のおかげで充実した1年間を過ごしました。今年度はさらにレベルアップできるよう精進していく所存です。これからもどうぞご指導ご鞭撻の程よろしく願います。

わたり病院の感染対策

わたり病院事務次長 山田 太一

新型コロナウイルスの基本的感染対策は『飛沫感染防止と接触感染防止』です。飛沫感染とは、咳やくしゃみや会話中にとびだす「鼻水」や「だ液」に含まれている病原体に感染することを言います。接触感染は病原体が付着した人や物に触れたことで感染することを言います。今、いたるところで言われているマスク、手洗いは飛沫感染と接触感染を減らすためです。

病院には感染リスクが少なからず潜んでいます。それでも安心して受診していただくため、当院では様々な取り組みを実施しています。一部を紹介いたします。

『待合スペースの区別』

待合スペースの区分は、新型コロナウイルス感染に特徴的な発熱を基準に、その他の症状など聞き取りをして区分しています。待合スペースのイスは間引きして隣同士の距離を一定に保ち、座る方向をみな同じ向きになるようにしています。

早期発見に努めています。待合スペースの区別と組み合わせることで、効果を発揮します。

『入院される方、その付き添いの方など病棟へ入る方のPCR検査を実施』

これは病棟での感染を防止する取り組みです。病棟での感染は病棟閉鎖につながる恐れがあり、二次救急を担当している当院が入院機能を失い、地域の安全を守ることができなくなります。また

経営的にも大きな損失を被ります。入院患者さん、付き添いの方にはご不便をおかけしますが、どうぞご理解ください。

『面会者の制限』

これは当院にとつてもたいへん悩ましいところです。無症状感染者がいるなかで、いかにして入院患者さんを守ることができなのか、という観点からこのような選択をいたしました。面会できないことは、患者さんはもちろんご家族にとつても不安であることと察します。安心して面会できる仕組みを模索しながらすすめています。

この他にも健診時の対策などもあります。紙面の都合上割愛させていただきます。

新型コロナウイルスに限らず、感染症対策の難しいところは、目に見えないところにあります。受診される方、入院されている方、職員を守るための対策は今後も実施されます。

最後に、病院であるためリスクはゼロにはなりません。安心して受診していただけるよう職員一丸となって感染対策に取り組んでいます。みなさんのご理解とご協力をお願いいたします。



座席は一つ飛ばしで

シリーズ 原発事故から10年を経て ③

避難者と支援者が懇談 力あわせて福祉社会を



福島医療生協は、震災原発事故直後に福島市内に避難された方への支援を、数か所で行っていました。中でも福島東高校体育館（以下東高）では、昼食の炊き出しを3月18日から4月5日にかけて行いました。去る2月25日、避難していた南相馬の方3名（林一重さん・林イミ子さん・三本松貴志さん）と炊き出しを行った組合員4人が懇談を行いました。以下はその概要です。

薬のない人がいたので、わたり病院で車を止めて、当直の先生に薬を出してもらうことにしました。その日は何もないうち、持ってきた硬いおにぎりを飲み物もなく食べて寝ました。

その後は自治会をつくって、床屋・銭湯・コインランドリーの利用やテレビ設置の交渉などを行ないました。避難者の中に家族が行方不明の人もいたので、自分たちで探しに行っていました。見つけると洗って安置所に運び、家族に確認してもらっていました。毎日が戦争のようでしたが、医療生協の先生や看護師、組合員の方々の支援は、本当に助かりました。

【林さんご夫婦の話】

同じ地域の75人が車27台に分乗して、福島に避難しました。病気があ

今は様々な交付金を活用して、仲間といっしょに組合を立ち上げ、ネギとブロッコリーを生産しています。

【三本松さんの話】

当時酪農をしており、牛にエサを与え鍵を閉めて避難しました。東高では子どもが余震でパニックを起こし大変でしたが、高校生が遊んでくれて

落ち着くことができた。その後は館岩村で林業、南相馬に戻って線量測定などの仕事をしてきましたが、今は牧草地だったところにブドウを植えて、ワインの生産に取り組んでいます。

【組合員の話】

大変だった避難生活を直接に聞いて、改めて役立てて良かったと思います。あの状況の中で、どうしたら自分の思いを行動にできるかと考えていたところに、支部から声がかかったことで多くの組合員が参加し、あの炊き出しを継続できました。支部の力が生きた取り組みだったと思います。

林一重さんは今後に向けて、地域全体の生活を良くするために力を合わせる大切。みんなが楽しく暮らしていける、福祉社会を作り上げていくことが必要ですね、と締めくくりました。



当時の体育館での支援の様子



「なかよし会」の 冊子を作ったら 地域が見えて来た！

理事
川崎 三枝子

「なかよし会」は杉妻支部の各町会（黒岩、伏拝、鳥谷野、等々）を越えた大きな会で60人位が参加しています。

少人数単位の班会では出来ないイベントが出来ます。バスハイクもかくし芸大会も、大勢だからこそ面白いし、一体感も生まれます。

20数年前に先輩達が、根気強く苦労して作ってくれた「なかよし会」は、町会を越え小学校区のつながりを重視しています。ご近所同士の班会はそのままで、両方入っている方も多くいます。昨年のコロナ禍での増資も、声を掛けると

たくさんさんの賛同者があり、心をひとつにしてくれました。

「なかよし会」の冊子を作り、素晴らしいメンバーを紹介しようと思いついたのは、ある運営委員の言葉でした。

「何十年も医療生協で張り、歳もとったのでもう終わりにする」こんな素晴らしい組織を、杉妻支部の基礎を作った方をこのままにして「さようなら」なんて出来ない。せめて文字で残そう。

先輩達を取材すると、熱い思いを語ってくれたり、文を書いたり、素晴らしい趣味を披露してくれました。

その方の人生の大切な事を文字や写真で残す場として、この冊子を利用してくれました。

ページを広げると、嬉々として「なかよし会」の行事に参加している顔があり、80代の先輩から60代の若輩？者まで熱い思いが伝わってきます。「この地区に住んで仲良く



最後まで元気で生き抜こう！」という意気込みが感じられます。内容を読むと、地域で繋がって暮らすことがいかに大事な事がわかります。冊子はVOL2まで発行し、驚くほどの反響がありました。人生の先輩達も喜んでくれました。VOL3も準備中です。みながますます、「読んでみたい！いつまでもとっておきたい！」と思える内容になる予定です。

地域の健康を担う 昨年度の 保健活動の報告

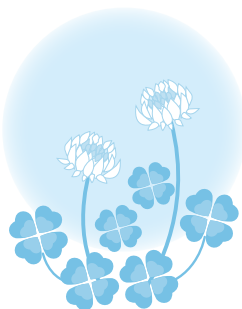
組合員活動部 関場 和史

みなさんこんにちは。保健委員会の関場です。新年度を迎え、新しいことをやってみるなど心躍らせる季節になりました。昨年度の保健活動を報告します。

禁煙ポスターコンクール

全国の医療生協でもダントツで、全国ナンバー1の応募数。7回目の昨年は27校239作品が集まりました。コロナ禍の中でも、作品展を2日間開催、310人の幅広い世代の方に見ていただきました。ポスターを描

3・11を 140名で アピール



東日本大震災から10年という節目の3月11日に、「原発なくそう」と「支援に感謝」を掲げて福島医療生協の組合員と職員、わたり福祉会、ファルマプランも一緒にスタンディングをしました。原発事故から10年が経つてもなお、その影響は私たちの生活に影を落としています。これからも、原発反対を掲げた取り組みを続けていきます。



毎回対象者の塩分摂取量は減ってきています。

健康づくりチャレンジ

参加者数は一般548人、キッズ67人と例年より少なかった印象です。しかしコロナ禍の中でもできるように、例年よりも早くスタートしました。昨年はすこしく編やフレイル予防体操編など当生協独自のチャレンジシートを3種類作成し推進しました。

すこしおチャレンジ

すこしお（減塩生活）に3ヶ月間取り組みんでもらいながら、一人2回（9月と12月）検尿を実施して、尿中のナトリウムとクレアチニンから1日における塩分摂取量の変化を比較します。昨年チャレンジされた参加者109人のおよそ

6割の方は全国平均値よりも少ない塩分摂取量でした。

マイカルテのリニューアル

マイカルテは健診結果などの資料をなくさないようにひとつにまとめるファイルです。気軽に振り返りができ、医療機関まかせではなく、自分の健康は自分で管理するという習慣が身につきます。今年度も普及に努めていきます。

わたしたち医療生協は、コロナ禍の中で人との繋がりを保つことが難しくなってきたからこそ、声かけや助け合いを大切に、保健活動を通じて地域との繋がりを広げていきたいと思えます。



職場紹介

電算室

情報を繋ぐ 人を繋ぐ

電算室主任 長谷川 隆

電算室の仕事は、医療情報システムの保守・管理を行う部署です。職員2名から構成されています。主な仕事としては、システムに関する職員からの問い合わせやトラブルに對

応することです。

病院内では、数百台ものパソコンやプリンタなどがネットワークに繋がっています。医師が電子カルテに指示を入力することで、看護師が注射をしたり、放射線科がレントゲンを撮ったり、臨床検査科が検査をしたり、医事課が医療費の計算をしたりなど、病院内で働く様々な人が、ネットワークに繋がっているパソコンを扱っているからです。

仕事は、パソコンやサーバーにトラブルが発生した際に対応するだけでなく、「プリンタの調子が悪い」「トナーの交換をしてほしい」など、様々な種類の業務もあります。

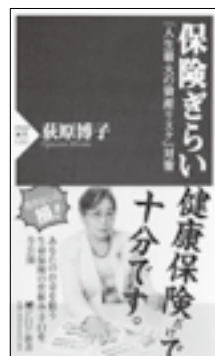
地震や水害などの時にもシステムが停止しないよう、保守・管理を行っています。また、個人情報情報を扱っている医療機関としては、情報漏洩などのセキュリティにも気を配り仕事をしています。

ふれあいクリニック さくらみず所長に齋藤紀医師



4月から佐藤勝前所長がわたり病院に異動となり、理事長である齋藤紀医師が新所長として着任しました。よろしく願います。

／ちよつと／ おすすめの本



保険がらいい健康保険で

「人生最大の資産リスク」対策

著者／荻原博子 PHP研究所

新年に入ってから、某銀行からDMが届いた。見出しには「介護で家族に迷惑をかけたくない方のみ読んでください」「公的介護保険があるから大丈夫：本

に迷惑をかけないと言いつつも、家族に迷惑をかける可能性がある。自己負担を軽くする「高額介護サービス制度」、医療とあわせて負担を減らす「合算療養制度」、税金の医療費控除、自治体の「介護貸付制度」の活用、ケアマネジャーが基本的に相談にのってくれる、など。

から介護一時金最高500万円を受け取れるという保険だそう。安心して暮らせる社会保障制度を、と運動してきた我々にとつてムカつくことこの上ない。そんな時書店で見かけた1冊。著者は生命保険や民間医療保険のからくりを解説し、公的な保険の活用こそが大切とうたった本を以前より出している。生命保険は不幸な目に遭わないとあまりもらえない。貯金がしっかりしている人は、生命保険は必要ではないという論理は明快だ。今回は介護保険も含めて解説している。自己負担を軽くする「高額介護サービス制度」、医療とあわせて負担を減らす「合算療養制度」、税金の医療費控除、自治体の「介護貸付制度」の活用、ケアマネジャーが基本的に相談にのってくれる、など。

社会保障としてどう守るか、という視点はないことと、この手のハウトゥもの

に値段が高く、やや満足感に欠ける点はあるが、友人や親せきに保険会社の営業マンが必ずいるほど民間保険が蔓延している今の世の中で、公的保険をまともに取り上げてくれる本は貴重だ。支部や班で買って、回し読みはいかがでしょう。

副理事長 齋藤 和衛

★ふるさとの歴史探してみませんか★ 61 小手森城を歩く

蓬萊支部 菅野 家弘

室町から戦国にかけて、全国の村々にはたくさんの館が作られた。

東和町でも23の館跡が知られている。小手森城は針道にある。旧安達東高校体育館の南、とがった山容が目につく。親切な案内板にそって国道から左に入る。鳥居の前に車を止めて南から登る。この登山道は、敵に隠れて物資を運んだ堅堀のあと。枯葉にすべりながら、160余の石段を登ると愛宕神社のある山頂に着く。登り途中の休みはかつての空堀の跡、山の南北にのびている。山頂からのびた支脈は、全て岩として利用されたのだろう。

この城を作った東安達の支配者石橋氏は部下の大内備前に滅ぼされた。大内備前は小浜城を本拠に小手森も支配した。戦国の世である。

その後、石川弾正がこの城を任されたが、やはり政宗に背き、小手森城は500人の死者でうまる。昔、「東和町史」の仕事で町内の館を何人かの生徒と調べたなつかしい山々である。今回は、かつての組合の仲間3人と語りながら登ってひとあせかいた。

戦国時代だから殺人は日常的だったかもしれない（銃を持つアメリカの社会も）。しかし、この小手森城だけでも1,300人の血で野を荒らした政宗、その戦場でのかぶとの前立（今回の地震で仙台の像の前立が折れたとか）を市のマークにしている我がふるさと伊達市は、どうした知性の持主なんだろう。

山頂の愛宕神社



尚、大内備前は伊達氏の家来として生き残った。小浜城が大内備前でなく伊達政宗を売り物にしていたのも気になる。